

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を
診察するわけ

第八部

最後の自衛官生活

2年間のメルボルン留学生生活を終え、帰国後の勤務先は母校防衛医大となりました。制服陸上自衛官として後輩学生を指導する役割でした。当時、医師国家試験合格率も低迷し（残念なことに現在はもっと低いようです）、併せて男女関係に起因する事故があり、それらを含めて「服務面も見直す」とのミッションでした。第五学年担当であり、17期、18期の学生諸君と日々過ごさせて頂きました。富士登山、沖縄戦史教育（現地指導を含む）、蔵王でのスキー訓練など様々な実習にも参画させて頂きました。当時は女子学生用の学生会（一般的な言葉では寮になります）、またテニスコートを削減して屋内プールと武道館を建設する初期段階の計画が進んでおりました。

プライベートでは防衛医大勤務に際して、隣接する宿舍が確保出来なかったため、和光官舎から通勤しました。幸い、防衛医大勤務室の隣に宿直用の部屋がありましたので、しばしば学生に混じって泊まりました。メルボルンからは私がまず単身で帰国し家族とともに住める住宅を探しました。子供達が健やかに過ごせるように大型分譲地の所沢フラワーヒル、仏子ニュータウン、飯能美杉台なども



候補になりました。最終的に、防衛医大・都心へのアクセスと埼玉医大 片山教授から、カルシウム代謝チームリーダーとしての招聘もありましたので、それらを勘案して狭山市柏原ニュータウンの中古住宅に決めました。1995年に帰国してからかれこれ25年狭山市に住んでいることとなります。

妻と子供達はメルボルンの家を撤収し、途中妻の弟家族が住んでいたシンガポールに寄ってから、四国宇和島に身を寄せました。短い時間でしたが、長男雄樹が現地岩松小学校に転入となり、亡き父母にとっても活気ある時であったように思われます。

その後、メルボルンから輸送した家具も到着し、柏原での生活がスタートしました。私は防衛医大での教官としての業務に加えて第三内科（内分泌・糖尿病内科）の外来業務に従事しながら、埼玉医大での学位審査に臨みました（防衛医大では他施設での研究実績で学位授与を得る仕組みがありません）。学位授与の過程でお世話になった埼玉医大 片山教授のお誘いを受け、6年間の学生生活と10年の陸上自衛官としての役務を終えて、制服自衛官のキャリアを終了しました。防衛医大教官としての勤務時代にはラグビー部員を含めて、多くの学生達が自宅を訪れ、またそれらの後輩達が各大学での教授・診療部長などの要職で活躍する姿を見てほほえましく思っている昨今です。



今回は、埼玉医大で経験したエピソードをお伝えしたいと思います。